

⑧ 竹本りつさん

【入信の道程】 54 竹本りつ姉

大正十三年十二月に八幡の敬行寺に入寺した。十四年の春の彼岸に説教せよと父から言われて布教した。ご法の尊さありがたさを語ればみな調子を合わして喜んでいるが、機の醜さを突いて実地の求道を勧めるとぽかんとしている。ご教化のありがたさを聞いて真似して喜んでいてだけで、後生が苦になって実地に開発した人はいないのだ。総代が帳場の計算をすましてきたときに「ごこの同行は話を聞くばかりで、開発した人は一人もいませんね」といったら妙な顔をしていたが、自分の家に帰って「今度のご院家はひどいことをいわれる。わしらはこんなに喜んでいてのに一人も開発したものがいないと言われた」と家内中で話していたそうだが、死が近づいたとき、あれだけ喜びよった信仰が吹飛んで、何にも聞いていないことがわかった。ご教化の話だから逃げるのだ、実地の体験をして一体になったのなら離れることはない、どうしようかという不安だけが残って苦しんだから、たびたび法話にいつてあげた。

永年聞いていたありがたい信仰は、ご教化に調子を合わしてただけですから参詣人が総崩れだ。その中で竹本りつという同行が、小さいときから熱心に信仰を求めていたが、わたしが機を突いて話すので、ご院家は若いからあんなに機を突かれるが、成就した法に眼をついたらよいのに、なぜ機のことをいわれるのだろうか、南無は機の方、阿弥陀仏は法の方で、機法一体に成就してあることを喜ばよいいのではないか、この機があるから助ける法が成就してあるのではないか、今日は注意しにいつてあげようか、と考えている内に六日目になって、待てよ、三毒五欲の煩惱のほかに逆謗の屍がいるぞ、今まではいることも知らなかったのだから助かってはいないぞ、三世の諸仏が呆れて逃げたといわれても、自分は素直なものと自惚れているのだからどうもない。死んだらお助けなら、生きている間は助かってはいないぞ、といわれたが本当だ。十劫の昔に助かっているのなら信心も安心もいらぬではないかといわれたが本当だ。

一念の信定まらん輩は、十人は十人ながら百人は百人ながらといわれてあるが、定まったかと念を押しみればなんともない。受け取っていないからなんともないのだ。地獄一定が極楽一定になったのなら大慶喜があるといわれたが、市会議員に当選してさえもその時は万歳ばんざいと有頂天になるが、わずか四年の任期ではないか。無量永劫迷わぬ身にさしていただいて、大慶喜の出ないのはどうかしているといわれたが本当だ。煩惱があるから喜ばれないと思つていたのは間違いであった。煩惱が撰取されていないから、助かつていないから喜ばれないのだ。死んでからお助けと思つているのだから、いま助かつていないから喜ばれないといわれたが本当だ、と思ひ出すと、機を見まいみまいとすればするほど、火坑から噴き出す溶岩が、なにもかもどろどろに崩してゆく。ありがたいも嬉しいも、聞いたも知つたもみな崩れて、七日目には信仰臭いものは微塵もなく、猛火に包まれて、行くも死せん、止まるも死せん、帰らばまた死せん、にっちもさっちもできなくなつて、説教の終わつた次の日には泣きなき訪ねてきた。

あなたが聞いてありがたいものを並べて、これこれと腰を掛けているのが自心建立の心という自力の親玉です。信仰がこつぱ微塵になつたときが絶対の悪ですから、絶対の善の名号と一体になれるのです。大沼は他人の信仰を崩して廻つていとうが、真仮の水際をはつきり説いてあげると、よい加減に合点している方便の信仰はみな崩れるのです。自身で聞いて覚えて合点して捏ね上げた自力の信仰ですから他力不思議の信仰を並べて出して比較してみせると崩れるのが当然です。

人々は信仰が崩れない間に頂こういただこうと繕うているが、それは他力の真似をしている自力の心ですから、その自力の機執の捨たらない間は他力不思議にはなれないのです。

私は勧学寮の調査員と、内地留学生と、平安中学の先生と三つを兼ねて上京するから、安孫子さんと楯さんが門司にこられるから必死で聴聞しなさい、必ず開発します。

その後両眼を失明したり、長男が放蕩をはじめたりしたが、この二つの苦痛よりも信仰が崩れたときの方が苦しかった。

みなさんお聞きなさいよ。法の話<sup>ほうのはなし</sup>を永年聞か<sup>ながねんき</sup>していたで、親<sup>おや</sup>が大丈夫<sup>だいじょうぶ</sup>というの<sup>の</sup>はご教化<sup>きょうけ</sup>であつて、仏智<sup>ぶつち</sup>が満入<sup>まんじゅう</sup>して凡<sup>ぼん</sup>一体<sup>いつたい</sup>になつたのなら、あなた<sup>あなた</sup>の機<sup>き</sup>が大丈夫<sup>だいじょうぶ</sup>にならなかつたら助<sup>たす</sup>かつていないのですよ。この機<sup>き</sup>を包<sup>つつ</sup>んで抜<sup>ぬ</sup>きにして、法<sup>ほう</sup>の尊<sup>とうと</sup>さに眼<sup>め</sup>をつけたのを第二<sup>だい</sup>願<sup>がん</sup>といつて法<sup>ほう</sup>の他力<sup>たうりき</sup>を知<sup>し</sup>つただけで、機<sup>き</sup>は助<sup>たす</sup>かつてはいないのです。助<sup>たす</sup>かつたか満足<sup>まんぞく</sup>したかと念<sup>ねん</sup>を入れてごらんなさい、うんともすんともいわない機<sup>き</sup>がいます。あれが千年経<sup>せんねんた</sup>つてもいうことを聞<sup>き</sup>くものかという人<sup>ひと</sup>がいます。が、千年経<sup>せんねんた</sup>つてもいわない機<sup>き</sup>を包<sup>つつ</sup>んでありがたがつているのですから、無量<sup>むりょう</sup>永劫<sup>ようかい</sup>開發<sup>かいはつ</sup>する時期<sup>じき</sup>がないのです。竹本<sup>たけもと</sup>さんは人生<sup>じんせい</sup>に生<sup>う</sup>まれた甲斐<sup>かい</sup>がない、今<sup>いま</sup>まであれだけありがた涙<sup>なみだ</sup>にくれて喜<sup>よろこ</sup>んでいたのに、一度<sup>ど</sup>地震<sup>じしん</sup>で揺<sup>ゆ</sup>れたら建<sup>た</sup>物の全<sup>ぜん</sup>部<sup>ぶ</sup>が崩<sup>ほう</sup>壊<sup>かい</sup>して、廢墟<sup>はいきよ</sup>になつてしまつたではないか。法<sup>ほう</sup>ばかり積<sup>つ</sup>み重<sup>かさ</sup>ねて喜<sup>よろこ</sup>んでいた信<sup>しん</sup>仰<sup>ごう</sup>（第二<sup>だい</sup>願<sup>がん</sup>）も機<sup>き</sup>を突<sup>つ</sup>かれたら一<sup>べん</sup>遍<sup>べん</sup>に崩<sup>くず</sup>れてしまつたではないか。今<sup>いま</sup>なら間に合<sup>あ</sup>うと先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>は言<sup>い</sup>われたが、どこで助<sup>たす</sup>かるのだ、どこで救<sup>すく</sup>われるのだと、まるで狂<sup>きやう</sup>氣<sup>き</sup>のよう<sup>よう</sup>に求<sup>もと</sup>めた。いよいよ望<sup>のぞ</sup>みの綱<sup>つな</sup>が切<sup>き</sup>れたとき、大願<sup>だいがん</sup>業<sup>ごう</sup>力<sup>りき</sup>の不<sup>ふ</sup>思議<sup>ぎ</sup>で撰<sup>せん</sup>取<sup>しゆ</sup>され、座敷<sup>ざしき</sup>らく中<sup>ちゆう</sup>匍<sup>ぼう</sup>い歩<sup>ある</sup>いて喜<sup>よろこ</sup>んだ。あらあ唯<sup>ただ</sup>という言<sup>こと</sup>葉<sup>ば</sup>もいらない唯<sup>ただ</sup>であつたと踊<sup>おど</sup>り舞<sup>ま</sup>いして喜<sup>よろこ</sup>ぶと同時<sup>どうじ</sup>に、ご恩<sup>おん</sup>知<sup>し</sup>らずは私<sup>わたし</sup>でございませと畳<sup>たたみ</sup>にしがみついて懺<sup>ざん</sup>悔<sup>げ</sup>した。強<sup>かう</sup>情<sup>じゆう</sup>我<sup>が</sup>慢<sup>まん</sup>なわたしは尋<sup>じん</sup>常<sup>じょう</sup>一<sup>いち</sup>様<sup>よう</sup>では法<sup>ほう</sup>を聞<sup>き</sup>かないから、眼<sup>め</sup>を取り子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>まで放<sup>ほう</sup>蕩<sup>とう</sup>さして、人<sup>じん</sup>世<sup>せい</sup>にはたよりになる者<sup>もの</sup>は何<sup>なに</sup>もないと私<sup>わたし</sup>から取<sup>と</sup>り上げて、必<sup>ひつ</sup>死<sup>し</sup>に求<sup>きう</sup>道<sup>どう</sup>さし無<sup>む</sup>上<sup>じやう</sup>の宝<sup>たから</sup>を与<sup>あた</sup>えてくださつたと喜<sup>よろこ</sup>んだ。

私<sup>わたし</sup>のところ<sup>ところ</sup>に求<sup>きう</sup>道<sup>どう</sup>者<sup>しや</sup>がきても留<sup>る</sup>守<sup>す</sup>が多い<sup>おほ</sup>から竹<sup>たけ</sup>本<sup>もと</sup>さん<sup>のところ</sup>へ行<sup>ゆ</sup>かすと、眼<sup>め</sup>が見<sup>み</sup>えないから仕<sup>し</sup>事<sup>ごと</sup>をしないので 朝<sup>あさ</sup>から晩<sup>ばん</sup>まで自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の求<sup>きう</sup>道<sup>どう</sup>の苦<sup>く</sup>心<sup>しん</sup>を話<sup>はな</sup>して「何<sup>なに</sup>をぐずぐずしているのです、一<sup>い</sup>息<sup>いき</sup>はいらなかつたら無<sup>む</sup>量<sup>りょう</sup>永<sup>よう</sup>劫<sup>かい</sup>苦<sup>く</sup>しまねばならないではないか」と法<sup>ほう</sup>話<sup>わ</sup>をする。他<sup>た</sup>の寺<sup>てら</sup>の同<sup>どう</sup>行<sup>ぎやう</sup>が信<sup>しん</sup>仰<sup>ごう</sup>を崩<sup>くず</sup>してやろうと思<sup>おも</sup>つて「竹<sup>たけ</sup>本<sup>もと</sup>さん ご法<sup>ほう</sup>義<sup>ぎ</sup>の話<sup>はなし</sup>をしにきたよ」「それはそれ<sup>それは</sup>はご苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>様<sup>さま</sup>でございませした。私<sup>わたし</sup>が出<sup>で</sup>られないからあなた<sup>あなた</sup>がたの方<sup>ほう</sup>から話<sup>はなし</sup>にきてくださつたとはありがとうございませした」「竹<sup>たけ</sup>本<sup>もと</sup>さん、真<sup>しん</sup>宗<sup>しゆう</sup>は他<sup>た</sup>力<sup>りき</sup>不<sup>ふ</sup>思議<sup>ぎ</sup>で、願<sup>がん</sup>も行<sup>ぎやう</sup>も仏<sup>ほとけ</sup>のお手<sup>て</sup>元<sup>もと</sup>に成<sup>じやう</sup>就<sup>じゆ</sup>して私<sup>わたし</sup>に廻<sup>え</sup>向<sup>こう</sup>してくださるので、素<sup>す</sup>直<sup>なお</sup>に受<sup>う</sup>け取<sup>と</sup>るよりほかに道<sup>みち</sup>がないので易<sup>やす</sup>いではないか、それを難<sup>むづか</sup>しく話<sup>はな</sup>すのは間<sup>ま</sup>違<sup>ちが</sup>いではありませんか」「私<sup>わたし</sup>も初<sup>はじ</sup>めは、他<sup>た</sup>力<sup>りき</sup>だから易<sup>やす</sup>いやすと四<sup>し</sup>十<sup>じゅう</sup>年<sup>ねん</sup>も聞<sup>き</sup>

されていましたが、ご院家さんから「易いというのは話ではないか、万善万行恒沙の功德を廻向してもらったか、ご教化の話を聞くのは易いが実地の体験が難しいのだ。法の話がありがたがっているのが第二十願の行者、きかん機が開発さしていただいたときが第十八願の行者になったので、話と体験とは天地の差があるから、喜びにも月とすっぽんほどの差があるのです」といわれました。」

「わしらは永年お説教を聞くが第二十願の桁とか聞いたことがない、」

「聞いたことがないはずです、言った者がいないのですから。名号をながめてありがたがって、死んでお助けと思っっているのが第二十願の行者で、名号と一体になり身も心も南無阿弥陀仏となったのが、平生業成の第十八願の行者というのです。だから贗物と本物、真似と真実の相違があるのです。」

「それでも蓮如上人は易いやすいと書いてあるではありませんか」

「親鸞聖人は難中の難といわれてありますよ。話は易いが実地は難しい。仏凡一体になれば、易いという言葉もいらぬ易さがあるのですよ。御文章の中にも「易往而無人とこれを説かれたり、この文のころは安心をとりて、弥陀を一向にたのめば、浄土へは行き易くして人なしといえるは、この経文のころなり」とありますよ。易いやすいにかぶれて、難中の難を忘れていては、無量永劫迷わねばなりませんよ。あなたがたは御文章を荷うてもう一度三悪道を廻ってくるのも楽しみでしょう」と話したら、崩しにきた同行が崩れてしまつて必死に求道するようになった由。